

---

# 神様セカイ

秋野ルカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様セカイ

### 【NZコード】

N8424Y

### 【作者名】

秋野ルカ

### 【あらすじ】

別の世界でのお話。

人類は世界から争いを完全に抹消するシステムを構築しました  
人類はそれを、神様。呼称した

## プロローグ（前書き）

今から少しだけ未来。

私たちが生活している世界の並行世界のお話。

人類は世界から争いを消滅させるシステムを構築した。

システムの正体とはなんなのであるうか？

## プロローグ

泥や人間の糞尿の臭いが入り交じつた臭いの立ち込める下水道を駆け抜けの影が十数個。

背後には同じ服を来た無表情な警備兵たち、耳をつんざくようなサイレンの音から察するに相当数の警備口哨も追跡してきているのだろう。

（何発当たったんだろう…。）

生まれた時から腕にはめ込まれている生体情報を管理する装置の付いた腕輪が警告音を鳴らし続けている。

光の塊が俺すぐ横を突き抜け続けていく。塊は嵐のよじてちらりと飛来し、そして抜けていった。警備兵からの射撃は止む様子はなかった。

次の瞬間、俺の肩口に鋭い痛みが走った。腕の装置の警告音はさらに増大し、俺がこれまでに500ccの血液を失つたとアナウンスする。かなり血液を失つてしまつたようだ、意識は朦朧としてきたがここで捕まる訳にはいかなかつた。

俺は曲がりかどを見つけるとそこに転がり込み、腰に下げた卵型の物体のピンを抜きそれを今まで走つてきた通路に放り込む。

カラーンコロンと言う金属音。

一瞬遅れて激しい閃光とともに爆音が響いた。

火薬を炸裂させて金属の破片を当たりにまき散らす、という旧式の爆弾だつた。

少し顔を出して通路をのぞき込んでみると、よくわからないところどころ焦げたピンク色の塊と機械の破片、そして周囲の壁には赤黒い色のペインントがされていた。

硝煙と一緒に血液と油の臭いが鼻腔に侵入してきた。俺は顔をしかめると、痛む足を無理やり前に押し出して逃走を再開した。

遠くでサイレンの音が再び聞こえた。

ある晴れた午後のことだった。

空には雲ひとつなく平穏であたたかな陽気だった。

俺は席替えで確保した最高の席、最後列窓際。コンサートのチケットで例えるなら、L席はゆうに超えvip席として一般には公開されることはないんじやないか、つてくらい快適な座席だれるように座り、個体情報の埋め込まれた全世界おそろいの腕輪を枕がわりにして惰眠を貪るうかとしていた

授業の内容に聴く価値など見いだせなかつた。

ちよつとばかり気取つた言い方になつたが、聞かされる内容は神様システムがいかに有能であり素晴らしい技術なのか、そんなことばかりだつた。別に神様に対して反感を持っているわけではない、確かにシステムが確立されてから世界から争いが消滅したのは事実であつたしむしろ多少なりとも評価をしていた。評価はしているが俺にとっての神様、というのはその程度の存在であり熱心に信仰すると言ひうことの対象としては認識していなかつた。

「アホくさ。」

隣の奴にも聞こえては居なかつただろう。そんな声で現在の心境を表現して、俺は糸を引かれるかのように眠りの世界へと引きずり込まれていつた。

と思つた。

俺の意識の紐は別の方向からも引っ張られてた。それもかなり強力に。

「…おい、起きろ！ 柳！」

野太い声。俺の意識は強制的に現実世界へと引き戻された。反射的に俺は立ち上がる。

声の主は教卓に立ち、指し棒をふりまわしている男性、即ち先生

だ。

「柳い、ずいぶん熱心に授業に参加してくれていたじゃないか？現在の暦の成り立ちについて説明してみろ」

クラスメイトの注目が俺に集まる。半分くらいがこの不運に同情するような視線を送り、残りの半分は何かに期待するかのような表情を浮かべていた。

「最後の争い後、前時代的宗教の全廃の影響でそれまで主に世界で使われていた太陽暦、太陰暦の使用が不可能になりました。そこで太陽暦を参考に考案されたのが新たな暦、新暦と呼ばれる最後の争いの終了当日を暦の始まりとした十一ヶ月、365日からなるものが現在の暦です。」

言い切った。とはいってもこれは人からの受け売りであり実際の俺の頭脳は悲しきかなそこまで性能のいいものではなかつた。

教師の眉間にしわが寄る、低い唸り声を上げながら腕を組む。アラでも探しているのだろうか。しばらくうなり続けたところで俺に着席の許可がおりた。

それからしばらく教師に再び目を付けられることもなく授業の終わりのチャイムが鳴り響いた。

授業が終わると思考と言つものは急激に冴え渡るもので俺の頭脳は早急な養分の補給を要求してきた。俺はズボンのポケットを「onso」ソと探り中から数枚の高価を引き出して握りしめる。

「カレーパンとコーヒー牛乳だな。」

購入するものがあ頭のなかで決定し、俺は購買部へと向かおうとした。

「ねえねえ宗一、今日はどんなトリックを使ったの。」

いきなり声をかけてきて失礼な奴である。

「俺がいつもするばかりしてるとしたら大間違いだぜ？」

「カニニングの常習犯が何を言つてているのよ。みんな気がついてるの知らないの？」

「知ってるさ、ただ証拠がないから先生たちも俺のことを追求でき

ないんだよ。」

「じゃあ今自由でした、つて職員室に連行してあげましょうか?」

なんてやつだ、これは誘導尋問じゃないのか?

「私、コロッケパンね。」

俺は教室を笑顔で送り出されていった。

彼女は飯島涼子、俺の幼馴染である。

教室のドアを後ろ手で閉じて俺は購買部への道を歩きだした。

息が苦しい、何があつたんだ。器官に水が侵入し呼吸が詰まる。廊下を歩いているはずなのに何かに引きずり出される気がする。その強引な力に俺はこらえきれずそのまま思い切り意識を引き抜かれた。

「ゲホッゲホッ！」

俺は自分の咽せる音で意識を取り戻し、咳が出るのに身を任せて気絶しているときに飲み込んでしまった汚水を吐き出す。

「落ちてたか…、どれくらいだ？」

周囲を見回して見ると、足元の部分が赤黒く染まっているのが確認出来た。

自らの服も血液や泥にまみれていて、元々の生地の色を確認することは出来なかつた。

相当の量の血液を失つたのだろう、意識は取り戻したものの視界は朦朧としていて油断するとまたあちら側へ引きずり込まれてしまいそうだつた。

意識を失うまでも、けたたましく警告音を鳴らしていた腕輪はエネルギーを失いかけているのか蚊のなくよつた音で申し訳程度の警告をしていた。

二三度転倒しながらもやつとのことで立ち上がり再び周囲を見回して、追跡者の気配を追う。先程まで遠くから聞こえてきたサイレンの音も鳴りやんでいて、俺の周りにある音は小さな警告音と服から滴り落ちる水音のみとなつていた。

服のポケットからぐしゃぐしゃに濡れた四つ折りの地図を取り出して、破かないように慎重に開く。ギリギリ判読することはできたが、自分のいる場所を見失つて「」とに気がつき地図はただの紙切れになり果てていた。

(マンホールを探そう)  
俺は壁にもたれる体制になりながら、ここからの脱出を開始した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8424y/>

---

神様セカイ

2011年11月26日17時55分発行